

「宗教と社会」学会「インターネットと宗教」プロジェクト研究会

(書評) 吉田純氏著『インターネット空間の社会学』(世界思想社、2000年)

黒崎浩行(國學院大學日本文化研究所)

hkuro@kokugakuin.ac.jp

2001年3月10日(土)

1 はじめに

(1) インターネットは宗教をどう変えるか、変えないか。(2) インターネットはどのような社会空間か。われわれは基本的に(1)に関心を持ちつつ、現実のインターネット利用場面に対して実証的なアプローチをとることにより、同時に(2)の問いも引き受けようとしてきた。(2)の答えが確定するまで(1)に答えるのは時期尚早とする、あるいは(2)についての断定的な言説をもとにして(1)を語る、といった道はとらなかったが、その理由づけは必ずしも明確でなかった。

吉田純氏の『インターネット空間の社会学』(以下、「本書」)は、社会空間としてのインターネットがはらんでいる不確定性を前提とし、それへの研究視座を確立することをめざしている。この方向づけは、「インターネットと宗教」研究にとってもきわめて重要だと思われる。

ここでは「研究視座」と「社会的布置状況」という二つのポイントに分けて、本書と「インターネットと宗教」研究との接点を検討していく。研究視座についてはおもに第1章から第2章までがかかわり、社会的布置状況についてはおもに第4章から付論までがかかわる。第3章は両者にまたがっている。

2 研究視座

2.1 非決定論的視座への転換

- 既存の議論の枠組 = 「技術決定論的発想」(3)。「『情報化』のシステム機能的な側面(経済や政治・行政への寄与)のみに焦点を当てていた」(13)。
- [1990年代] CMC ネットワークの全体社会への浸透 「個人のコミュニケーション・メディア、さらには個人のコミュニケーション空間(生活世界)を世界大に拡張しうる装置」(13)という側面から語られるようになる。
- 「非決定論的発想」(4)へ。「情報・メディア技術自体もまた社会的・文化的に意味づけられ構築されるという双方向的な視点」(5)。
- 非決定論的視点にもとづき、「情報ネットワーク社会」がはらむ「アンビヴァレントな志向性」(44, 45, 図 1-3)を明確に認識しながら分析。

この流れは「情報化と宗教」論にも当てはまる。しかし、現実の「情報化」の進展にともなう「情報化社会論」における視座の転換であり、社会理論全体、あるいは宗教社会学理論からすると遅れてやってきた変化ではないか。本書の「情報化」の3時期区分(18)、[黒崎 2000a]の「情報化と宗教」論の研究史、[寺田 2000]の日本の宗教社会学の研究史区分を年代的に重ね合わせてみると:

年代	「情報化」	「情報化と宗教」論	日本の宗教社会学の展開
1960年代	第1期 言説主導の「情報化」	「情報産業としての宗教」論: 梅棹忠夫 (1963)、YTV 情報産業研究グループ (1975)、飯坂良明 (1978)	第3期 世俗化論と構造機能主義による社会変動へのまなざし
1980年代	第2期 システム中心の「情報化」と諸問題の顕在化	新宗教のメディア布教研究: 文化庁 (1988)、『新宗教事典』 (1990)、阿部美哉 (1990)	第4期 内在的理解と教団類型論による新宗教へのまなざし
1990年代	第3期 コミュニケーション中心の「情報化」	現代の宗教行動・宗教意識と情報化: 川崎賢一 (1983)、島園進 (1996)	第5期 構築主義による宗教現象の構築過程へのまなざし

非決定論的視座への転換を、構造機能主義的アプローチから解釈的アプローチへの転換と読みかえるならば、宗教社会学の展開では第4期、すなわち1975年に宗教社会学研究会が結成され、新宗教の「内在的理解」というアプローチが提唱された時期にあたり、それは1990年代における「情報化社会論」の転換よりも10～15年さかのぼる。

つまり、宗教の社会学的研究では(おそらく他の領域でも)、「情報化」が解釈的アプローチによってはながら扱われずにおかれ、しかし今や情報ネットワークの全体社会への浸透により、これを視野に収めなければならなくなった。流れをこのようにも描き出すことができただろう。

それにもかかわらず、本書で1990年代における研究視座の転換がことさら強調されているのには、「情報化」が依然として政策レベルで技術決定論的視点から語られていることへの異議提起が込められている、と読むことができる。

また、本書はハーバーマスの「システム/生活世界」図式を一貫して援用していることから明らかなように、ミクロな生活世界における意味の解釈や、その構築過程の分析にとどまるのではなく、生活世界とマクロな(政治・経済)システムとの関係調整が視野に収められており、情報ネットワーク社会のアンビヴァレンスも、システムと生活世界の両者について考察されている(45)。

2.2 分析枠組: 仮想社会 と 現実社会 の相互浸透、仮想社会 の三つの特性

- 情報ネットワーク社会における生活世界とシステムとの関係調整は 仮想社会 と 現実社会 との相互浸透(54)という枠組のもとで考察される。
- 仮想社会 の社会的特性: ネットワーク性、匿名性、自己言及性(58-62)。匿名性は 現実社会 からの離脱を促し、ネットワーク性は 現実社会 の積極的な組み換えを促す志向性をもつが、自己言及性は、前者をコントロールし後者の実現可能性をより高めるという意味で、両者を調停する(62)。
- 仮想社会 のモデル化をめぐるモダン・アプローチとポストモダン・アプローチとの対立。仮想社会 のネットワーク性と匿名性のいずれを重視するかという事実認識の対立と、それを越えた規範的自己理解や社会構想のレベルでの対立。経験的事実としてポストモダン・アプローチの知見を認めつつ、規範的レベルではモダン・アプローチの批判的継承を唱える(105, 表3-1, 119-120)。

前節でとりあげた非決定論的視座への転換とあわせ、評者は共感する。これまで分析枠組の精緻化を怠ってきたため、大いに参考にしたい。

評者が取り組んできた事例との関連:

- 京阪神地域のベッドタウンにある神社[黒崎 2000b]。人口移動により共同体的紐帯の崩壊した地域社会のなかで、地域住民との接点の一つとしてウェブサイトを活用している。しかし、オンラインのみでの親密な相互行為は重視していない。

ネットワーク性を重視しつつ 現実社会 へはたらきかけ。匿名性の排除。

- キリスト教系メーリングリスト [黒崎 2000c]。時間に制約された同時的なコミュニケーションがめざされ、私的な話題が議論を活発化し、現実生活と同等のコミットメントが求められる(が、これへの離反も)。

ネットワーク性の分節化と匿名性の排除(の困難)。自己言及性による 現実社会 への批判の強まり(ただし積極的なはたらきかけには至らない)。

しかし、分析枠組のすり合わせを行うだけでは、今回のテーマである「宗教的共同性への求心力と遠心力」というベクトル、あるいは本書がめざしている自由主義的な価値志向とのズレを明るみに出すのは困難だと思われる。これについては後半部における、「情報ネットワーク社会」の社会的布置状況との関連で検討することにしたい。

3 社会的布置状況: 「公共圏」をめぐって

- 市民的公共圏の成立原理: 平等性・公開性・自律性(145)。
- 現代の公共圏の具体的可能性...(平等性)アクターとオーディエンスの分化、(公開性)複数のローカルな公共圏が相互浸透する通路、私的公共圏から公共圏へというテーマの流れ、(自律性)自己言及性によって「自己関係的」に再生産される(146-149)。
- 公共圏に対して情報ネットワーク社会がはらむアンビヴァレンス 図 5-1(154)。
- ミクロ公共圏とマクロ公共圏それぞれについて考察。

今回は、ハーバーマスの「公共圏」論をふまえて厳密に議論するだけの準備ができなかった。とりあえず、公共圏の三つの成立原理に対する接近・離反という、情報ネットワーク社会がもつアンビヴァレンスについて、「宗教的共同性への求心力と遠心力」に関係する事象が現在どのようにかかわっているかを指摘するにとどめたい。

3.1 平等性: インターネットにおける宗教情報のアセスメント

接近: 現代の抽象化された公共圏であるマスメディアにおける「アクターとオーディエンスの分化」が相対化される。

離反: 情報格差の拡大、経済システムによる市場化

櫻井義秀 [櫻井 2000] は日本において「カルト」、「マインド・コントロール」という用語が、主としてオウム真理教事件を契機に爆発的にマスメディアに頻出し、明確なイメージとして定着していった過程を詳細に分析している。このようなマスメディア主導の宗教観の定着は、情報ネットワークの普及によってどのように変化するのだろうか。インターネット上では、オウム真理教(現アレフ)やこれを支持する側に立つ意見が発信されており、また反対する側より綿密な情報・意見の交換、さらに対立する双方の議論などに、自由にアクセスし、参加することができる。しかし、それらをいかに評価(assess)するかは依然として問題であり、情報に受け身で接するわけにはいかない当事者にとっては深刻で切実な問題でもある。

3.2 公開性: 宗教勢力による規制への関与

接近: 複数の公共圏の相互浸透、私的生活圏からのテーマの流れが拡大。

離反: 経済システムによる市場化、政治システムによる監視・規制。

本書でも、アメリカでキリスト教徒同盟 (Christian Coalition) が通信品位法賛成派としてロビー活動を展開した事例に触れられている (159) が、永崎研宣 [永崎 2001] はさらに、イスラーム諸国が検閲を加えている例、中国政府が治安上の理由により法輪功の国内ページ閉鎖や海外のページへのアクセス禁止を行っている例を紹介している。

もっと込み入った例としては、1995 年末からサイレントロージー教会がインターネット上の批判者に対し、著作権侵害で訴訟を起こすなど広汎な反対活動を展開したが、これは情報ネットワーク社会の「公開性」を既存の法的・経済的な圧力によって抑えようとした側面ばかりでなく、大量の賛同メッセージをニュースグループに投稿しつづけるなど、情報ネットワークの特性を逆手にとった戦略を展開したのもであった [Peckham 1998]。公開性への宗教の関与は今後も注目されるだろう。

3.3 自律性: 精神世界/新霊性運動とのかかわり

接近: 自己言及性の拡大。

離反: 匿名性、ミクロな権力への欲望。

政治・経済システムの「生活世界の植民地化」によって「自律性」が外側から妨げられるという面だけではなく、仮想社会 の特性である匿名性によってミクロな欲望・権力の追求が増大し、自律性が内部から侵食される点が問題とされている (153)。

この自律性のゆれについて、デイヴィッド・ライアンがポスト・モダニティのあらわれとしてポジティブに規定していることに言及されている (104)。同じライアンが、ニューエイジ運動のポストモダン性を論じていること [島嶼 1996: 364-5] に注目しておきたい。ライアンはニューエイジとポストモダンの共通点として、(1) 新しい時代の到来という考え、(2) 古い文化の後退は古い真理の廃棄を意味するという考え、(3) 新しいものは自己 (self) に焦点を置いていること (自己の中心性)、(4) 選択と消費主義への親近性、(5) 社会改革的な政治への疑い、(6) 意識のグローバル化や故郷喪失を反映していること、(7) 多中心的多元的なネットワーク的組織を志向すること、(8) 世紀末的な不安との親近性、を挙げる。この議論には批判もあるが、いずれにしても、精神世界/新霊性運動の、とりわけ自己に関与するさいの方向づけを考察するうえで、ここで指摘されている情報ネットワーク社会のアンビヴァレンスは、重要な示唆を与えていると思われる。

4 むすび

以上、本書と「インターネットと宗教」研究との接点をざっと描いてみた。本書が依拠するハーバーマスの理論には門外漢のため、誤解や見落としがあるかもしれない。また、接点をどう考えるかについて、飛躍や浅い考察が含まれていると思われる。ご指摘いただき、討議で深めていただければ幸いである。

参考文献

- 黒崎浩行 2000a 「電子ネットワークと宗教をめぐる研究史」黒崎浩行 (編)・葛西賢太・川島堅二・田村貴紀・深水顕真 2000 『電子ネットワークキングの普及と宗教の変容』黒崎浩行、3-10。
——— 2000b 「神社ウェブサイトをめぐる社会的文脈」黒崎編 『電子ネットワークキングの布教と宗教の変容』107-128。

- 2000c 「現代のメディア・コミュニケーションにおける宗教的共同性 キリスト教系メーリングリストの場合」大谷栄一・川又俊則・菊池裕生編『構築される信念: 宗教社会学のアクチュアリティを求めて』ハーベスト社、86-109。
- 永崎研宣 2001 「インターネットと宗教: 情報規制をめぐる動向について」『ラク便り』9: 50-54。
<<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nagasaki/rircdayori.html>>
- Peckham, Michael 1998 “New Dimensions of Social Movement/Countermovement Interaction: The Case of Scientology and its Internet Critics,” *The Canadian Journal of Sociology* 23(4): 317-347.
- 櫻井義秀 2000 「日本のマスメディアにおける「カルト」「マインド・コントロール」用例の時系列分析: 1990年から1999年まで」櫻井義秀(研究代表者)『教団研究の今日的課題』平成10,11年度科学研究費補助金(萌芽的研究)報告書。
- 島蘭進 1996 『精神世界のゆくえ: 現代世界と新霊性運動』東京堂出版。
- 寺田喜朗 2000 「20世紀における日本の宗教社会学」大谷・川又・菊池編『構築される信念 宗教社会学のアクチュアリティを求めて』157-175。
- 吉田純 2000 『インターネット空間の社会学』世界思想社。